大学生における死生観形成の要因

Factors of views of life and death formation in college students.

後　藤　有　紀

Ⅰ．問題

「死生観」は、「生」や「死」について考えを巡らせることと定義されている（広辞苑第６版より）。長嶺（1982）によると、「死生観とは一つ目は平素の『生』の充実のため、『死』を如何に考えるかであり、二つ目は非常の際、死に臨んで何を念じ、何を祈り、何を望み、何を願うか」であると述べている。

人間の死生観の形成について、七木田（1991）は、「小学校高学年の時点で大人と同じ死の認識をする」という。その経過は、Wenestam&Wass（1987）によると、まず子どもは、死を一次的な束縛で、外的な力に起因すると考える。その後、死の普遍性・非可逆性を認識し、内的な原因も取り入れる段階を経て、やがて死が非可逆的・普遍的・個人的であるということを理解し、永遠の命（不死）に関する抽象的な信念を表明することが出来るようになる、とされている。

大学生の死生観に関して丹下（1999）は、「青年期において死を直接的に主題として扱うことは、人生そのものを考える機会となり、その後の人生に対する基盤を形成する」と述べており、敏感に社会を感じ取る青年期の間に死について考えることは重要であると言える。

伊藤（2007）の、大学生を対象に死のイメージを調査した研究では、アンケートを行った男女約90名の内、８割は死後の世界を信じているという結果が出た。伊藤（2007）は、「若者の死生観の諸特徴は①死後のイメージの流動性、②家族成員による死後のイメージへの影響、③死別体験のタブー化、④親密な他者としての死者、⑤他者の死と自己の日常の乖離」であると述べている。

糸島（2005）の看護学生と大学生の死生観形成に関する調査では、死のイメージは一般的な事実や現象、感情表現、自分自身の死という３つに分けられた。そして、看護学生は死を「一般的な事実や現象」としてイメージしている学生が62.2％と多く、大学生では看護学生に比べて「感情表現」をしている学生が56.8％と多かった。しかし、自分自身の死についてまで考えた学生は、看護学生で26.7％、大学生は25.0％という結果となり、両者の間で差は見られなかった。

大学生の死生観形成における性差の研究について調べてみると、女性の方が男性よりも死を「解放としての死」として捉え、「死後の世界観」や「寿命観」を重視するという研究（赤澤、藤田（2007））や男性の方が、孤独感が強いほど自殺に対して否定的な態度をとる（山本ら（2006））という研究結果が示されているが、大学生の男女における死生観の違いについて明確に記載している研究は数多くない。

これまでの先行研究から、筆者は、大学生は自分の死についてイメージをあまりしない

キーワード：大学生、死生観

のではないかと考えた。死と隔離された生活を送っている現代社会では、自分が死ぬというイメージが湧きにくく、死についてどのような感情を持つことになるのかを明確に持つ機会がないからである。

Ⅱ．目的

本研究では、死生観を、「生」や「死」について考えを巡らせることと定義する。死に対する態度を振り返ることを通じて、大学生の死生観形成の要因について明確にすることを本研究の目的とする。更に、先行研究において課題となっていた、性差の影響について検討をする。

本研究では、仮説を以下のように設定する。

仮説１.大学生の死生観形成には死別経験が大きく関わるのではないか。

仮説２.女性の方が、男性よりも死について考えを巡らせるのではないか。

Ⅲ．方法

①　調査実施期間　2014年７月

調査協力者は、都内の私立大学に通う学生１年生～４年生計299名。調査依頼に承諾した協力者299名に質問紙調査を行った。調査依頼に際して、回答は任意であり、回答をいつでも拒否できることを伝えた。

全協力者のうち、年齢が23歳以上の回答者６名と質問紙を半分以上回答していない10名は、分析の対象から除外した。最終的な協力者の性別の内訳は男性122名、女性158名、平均年齢20.02歳（18歳～22歳）であった。

調査方法は、個別自記入形式の質問紙調査で実施した。集団調査形式で実施され、回答依頼時に口頭説明を行い、質問紙に記載された注意事項を読んでもらい合意を得た。謝礼については提示をしなかった。回答はすべて無記名で行われ、実施時間は５分～10分であった。

②　質問紙の作成

１．フェイスシート

調査の際の注意事項を記載し、(①無記名で行われること、②死について考えることがあるため、③回答したくなくなった段階で回答を中断することが出来ること)、学年･学科･性別・年齢をたずねた。

２．死別経験の有無と死別経験の内容についての自由記述

死別経験の有無について確認する項目である。死別経験をしたことがあるかを「はい」「いいえ」で答えてもらい、はいと答えた回答者には最も印象に残った死別経験について、死別した対象、死因などについて差支えのない範囲で詳細に回答してもらうように教示を行った。また、死別からどのくらいの期間が経過しているのかについて、回答を求めた。

３．死に対する態度尺度改訂版（以下DAP-Rと記す）

隈部（2003）によって作成された、死に対する肯定的態度から否定的態度までを幅広く測定する尺度である。「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「ややそう思わない」「そう思わない」の５件法で27項目の回答を求めた。接近型受容（死後の世界を楽しみにしているなど)、死の恐怖（死について考えるのは恐いなど)、死の回避（死についてなるべく考えないようにしているなど)、逃避型受容（死は人生の苦しみから解放されることであるなど）の４因子に分けられ、日本の仏教的な死生観にも対応できるように尺度項目が修正されている。

４．生や死についての興味

生や死について回答者の興味関心についてたずねる項目である。「あなたは生や死について考えることについてどのくらいの興味がありますか？」という問いに対して「とても興味がある」「やや興味がある」「どちらでもない」「あまり興味がない」「全く興味がない」

の５件法で回答を求めた。

５．生や死を考えるきっかけとなった出来事の自由記述

今までの経験で生や死について考えるきっかけとなった出来事を自由記述で回答を求めた。「あなたが自分なりに生や死についての考えをもつようになったきっかけはありますか？今までの経験の中で思い当たる出来事や影響を受けたもの（人・物など）を出来る限り詳細に、複数お答え下さい。」という教示を行い、出来事やものをこちらからは特定せずに自由記述形式で回答を求めた。

Ⅳ．結果

１．統計による量的研究結果

（１）死別経験の有無とDAP-Rの得点の比較

死別経験の有無とDAP-Rの各因子得点をｔ検定で比較をした（Table.1）。その結果、死別経験の有る群と死別経験の無い群で接近型受容型に有意差が見られた（p＜.05）。他の因子得点を死別経験の有無で検定をしたが、有意差が見られなかった。

（２）男女差とDAP-Rの得点の比較

次に、性別でDAP-Rの各因子得点をｔ検定で比較を行った（Table.2）。その結果、男性と女性で逃避型受容型に有意差が見られた（p＜.05）。

（３）生や死に対しての興味度合いとDAP-Rの得点の比較

興味の度合いでDAP-Rの各因子得点で分散分析を行った（Table.3）。その結果、興味の度合いで死の回避型で有意差が見られた（p＜.05）。

（４）学科とDAP-Rの得点の比較

学科別でDAP-Rの各因子得点で分散分析を行った（Table.4）。その結果、臨床心理学科の学生と仏教学科の学生で有意差が見られた（p＜.01）。

（５）学年、年齢とDAP-Rの得点の比較

分散分析の結果、学年間でも年齢間でも有意差は見られなかった（n.s.）。

２．KJ法による質的研究結果

（１）死別経験についての想起

死別経験の有無と死別経験の内容についての自由記述を回答者に求め、死別経験について記述された回答をKJ法にて分析した。死別対象者、死因、死別期間については挙げられた項目を分類した。死別経験の内容については、死別経験について自由記述された中で、想起される内容について分類を行った。

①死別対象者

死別対象者として挙げられたのは主に、「祖父母」「父母」「親戚」「先生」「曾祖父母」など年上の間柄が多かったが、「兄弟」「友人」など、同年代の死別を経験している人も見受けられた。

Table 1　死別経験の有無とDAP-Rの得点平均比較

		n	平均値（SD）	効果量（ｒ）	ｔ値	df	P
接近型受容型	死別経験有り	198	37.08（8.096）	0.13	2.100	281	p＜.05*
	死別経験無し	85	34.88（8.014）				
死の恐怖型	死別経験有り	198	17.01（6.754）	0.01	-.217	281	p＜n.s.
	死別経験無し	85	17.20（7.303）				
死の回避型	死別経験有り	198	21.91（5.729）	0.03	.418	281	p＜.n.s.
	死別経験無し	85	21.61（5.206）				
逃避型受容型	死別経験有り	198	16.76（5.141）	0.08	1.394	281	p＜.n.s.
	死別経験無し	85	15.84（5.106）				

注：* p＜.05（以下同じ）

Table 2　男女差とDAP-Rの得点平均比較

		n	平均値（SD）	効果量（ｒ）	t 値	df	P
接近型受容型	男性	122	36.80（9.166）	0.04	0.720	278	p＜n.s.
	女性	158	36.09（7.255）				
死の恐怖型	男性	122	16.78（7.451）	0.03	-0.466	278	p＜n.s.
	女性	158	17.16（6.399）				
死の回避型	男性	122	22.07（5.773）	0.04	0.716	278	p＜.n.s.
	女性	158	21.59（5.363）				
逃避型受容型	男性	122	17.19（4.950）	0.13	2.171	278	p＜.05*
	女性	158	15.86（5.169）				

注：* p＜.05（以下同じ）

Table 3　興味の度合いと各因子得点の平均値比較

因子	全く興味がない（1）平均値（SD）	あまり興味がない（2）平均値（SD）	どちらでもない（3）平均値（SD）	やや興味がある（4）平均値（SD）	とても興味がある（5）平均値（SD）	多重比較	F
接近型受容型	41.14（7.472）	37.29（8.679）	36.77（7.199）	35.22（7.126）	36.93（10.237）	n.s.	2.078
死の恐怖型	21.21（8.568）	17.14（6.937）	16.98（6.638）	16.36（6.187）	17.50（8.023）	n.s.	1.653
死の回避型	21.00（6.610）	20.34（5.755）	20.37（5.716）	21.56（5.232）	24.76（4.817）	2,3,4＜5**	5.771
逃避型受容	18.50（4.553）	16.37（4.857）	16.85（4.207）	16.55（4.954）	15.33（6.431）	n.s.	1.294

注：** p＜.01（以下同じ）

Table 4　学科と各因子得点の平均値比較

因子	臨床心理学科 平均値（SD）	仏教学科 平均値（SD）	アーバン福祉学科 平均値（SD）	表現文化学科 平均値（SD）	人間科学科 平均値（SD）	歴史学科 平均値（SD）	教育人間学科 平均値（SD）	人文学科 平均値（SD）	多重比較	F
接近型受容型	38.06（7.653）	31.54（8.664）	35.00（7.661）	36.26（6.621）	40.80（7.662）	37.67（8.714）	34.73（8.977）	37.88（7.855）	仏教＜臨床**	2.874
死の恐怖型	16.62（7.292）	17.92（6.615）	17.13（6.368）	19.43（6.458）	20.60（7.436）	16.19（6.501）	16.64（8.007）	16.28（5.705）	n.s	0.800
死の回避型	21.92（5.859）	23.19（4.708）	21.74（4.976）	23.17（5.424）	25.00（4.062）	19.90（5.822）	19.88（5.792）	22.44（5.531）	n.s	1.657
逃避型受容	15.43（5.711）	17.12（3.923）	16.70（4.952）	16.91（4.786）	19.60（5.030）	16.90（5.195）	17.36（4.866）	17.24（4.475）	n.s	1.218

注：** p＜.01（以下同じ）

②死因

死因について、「ガン」や「病気」を挙げている人がほとんどであったが、「自死」「事故」などの死因について挙げている人もいた。また、2011年の東日本大震災を死因に挙げている人もいた。

③死別期間

死別期間としては、５年以上前に死別を経験した人と５年以内に死別を経験した人が半分くらいずついた。また、「昔過ぎて覚えていない」という回答もあった。

④死別経験

死別経験についての想起についてKJ法で分析を行った結果、死別経験を想起する際には「状況」「経験の語り」「反応想起」の３つが主に語られることがわかった。「状況」というのは死別した状況を客観的に述べたもので、死別当時の状況を述べたものや、死別前の状況や死別対象者の行動などが語られた。また、死別に関わるある特定の場面の印象について記述している回答も見受けられた。

「経験の語り」には、自分が実際経験した内容について回答されたものや、死別直後の経験（葬式前の納棺についての経験談など）が語られる一方で、夢で経験した内容について印象的だった事柄が語られた。

「反応想起」が最も多い回答であり、特定場面を想起した際に感じたことや、葬儀の最中の親族の反応、死別による周囲の反応など、反応想起には感情がともなった記述が挙げられた。また、看取れなかった経験からきた十分ではない別れ方や、死別を経験しても涙がでなかったことの想起が挙げられた。

（2）生や死について考えるきっかけ

生や死について考えるようになったきっかけについて、自由記述で回答を求めた。回答は任意とし、集まった回答をKJ法にて分析を行った。

①きっかけ

「きっかけ」の中でも大カテゴリーには「死別経験」「死別以外の経験」「外的要因」「不明」が挙げられた。死別経験の中では「死別した対象」と「死因についての情報」が挙げられ、先述した対象者の他にも「ペット（愛犬・愛猫）」との死別について語られることが多かった。死別経験をきっかけに挙げる回答者は非常に多く、死別経験の想起の際に語られた経験を再度挙げる回答者もいた。「死因についての情報」では、先述したような詳しい死因が語られるよりは、インパクトのある死の原因について語られることが多かった。自死についての記述が多く、自死未遂の経験について、いじめから起きた自死事件についてなどの記述が見られた。また、2011年に起きた東日本大震災がきっかけとなった記述やマスコミの報道がきっかけという内容が見られ、周りで起きた生や死に関する出来事の情報から考えるようになったことも挙げられた。

「死別以外の経験」では、自分の人生で経験した出来事（成人式など人生の節目など）や、仏教系の大学ならではの僧呂としての経験が挙げられた。葬式のカテゴリーには、参列者としての経験と、僧呂としての経験どちらも含まれていたため、死別経験とは分けて分類した。加えて、自分自身への自問自答や空想などから生や死についての考えを深めたという経験が挙げられたので自分の考えという項目にまとめた。

自分が経験したこと以外で生や死についての考えを深めた事柄が挙げられたため、「外的要因」という項目にまとめた。外的要因には様々な事柄が挙げられ、フィクション・芸能などの現実で実際に起きた内容ではないものが挙げられた。教育や思想、他者の行動といった第三者から発された内容がきっかけとなることも挙げられた。

きっかけのカテゴリーの中には、きっかけがわからないという内容や死が元々身近で起きるもの（実家がお寺で、葬式がよく行われたなど）だったことから、特別な経験などが思いつかない例が挙げられた。きっかけがわからない項目については「不明」というカテゴリーに分類をした。

Table 5　死別経験の想起についての分類

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
印象的な死別経験	・状況	・死別の状況
		・死別前の状態
		・ある特定の場面の思い出
	・経験の語り	・夢で見た経験
		・自分としての経験
		・死後直後の経験
	・反応想起	・ある場面を見て思ったこと
		・葬儀の最中の親族の反応・行動
		・死別による周りの反応
		・十分ではない別れ方
		・涙がでなかった経験

Table 6　生や死について考えるようになったきっかけ

	大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
生や死について考えるきっかけ	死別経験	・死別した対象	「ペット」「身内」「知り合い」「友人」「恩師」
		・死因についての情報	「自死」「事故」「震災」「マスコミの情報」
	死別以外の経験	・自分の経験	「自分の経験」「僧侶としての経験」「葬式」
		・自分の考え	「自問自答」「空想」
	外的要因	・自分以外の要因	「フィクション・芸能」「思想」「教育」「他人の姿」「人との話から」
	不明	・きっかけが不明	「死の身近さ」「きっかけがわからない」
「生」や「死」についての考え	宗教要素	・スピリチュアル的な考え	「霊」「死後の世界」「魂」「宗教の教え」
	死に向けた考え	・死への諦め	「死の無意味性」「生きることへの諦め」「死の受容」
		・死への肯定的態度	「自身の死は恐くない」「死について考えることは嫌ではない」「苦しみからの解放としての死」
		・死に触れたときの反応（自他）	「死別へのインパクト」「対応に対する怒り」「他人の言動」
		・死に対する不安	「死は恐い」「突然性への不安」「自分以外の人の死に対する苦しみ」「恐怖」
		・死に対する非現実感	「テレビからの影響」「理解不能」「後悔」「死の非現実感」
		・死についての空想	「もし自分が死んでいたら」「もし違う行動していたら死んでいただろう」
	生に向けた考え	・生に向けられた意識	「生の前向きな姿勢」「死は今触れることではない」「命の尊さ」
		・その他	その他

②生や死についての考え

生や死についての考えについて具体的な内容が述べられた項目を分類した。大カテゴリーには「宗教要素」「死に向けた考え」「生に向けた考え」が挙げられた。宗教要素は、全体的にスピリチュアル的な考え方をまとめて項目とした。実際の宗教の教義から、死後の世界や霊的存在について挙げられた。

死に向けた考えは、最も項目数が多くなった。死への諦めや死に対する不安、死への肯定的態度はDAP-Rの因子でも挙げられている内容であり、重なる要素があったことが述べられる。また、死に対する非現実感が挙げられた。死のタブー化からくる死の隔離が感じられた。

生に向けた考えは、死に向けた考えに比べ挙げられず、生よりも死について考えることが多い、もしくは考えやすいようであった。生に向けた考えの中には「死は今触れることではない」という内容も挙げられた。大学生ならではの回答と思われた。生や死について考えるようになったきっかけについて分析した項目は、Table 6にまとめた。

Ⅴ．考察

（1）統計による量的研究の結果について

①死別経験と死に対する態度の関連

死別経験をしている方が接近型受容型な態度をとるという結果であった。このことから死別経験をしている人の方が、死を肯定的に受容すると言える。死別を経験している人は、亡くなった人に思いを巡らせ、死後の世界についての考えを深める経験をしていると言える。自分と関わりのある他人の死別を経験した際に、その人が死後も死後の世界のどこかで暮らしていて、私たちを見守っているという期待や、お墓参りの風習、先祖崇拝などから「死者は我々を見守っている」という考え方をしやすくなるのではないかと推測する。

「大学生の死生観形成には死別経験が大きく関わるのではないか」という仮説については、死別経験だけが大きな要因とは、本研究では考えにくいことがわかったが、大学生の死に対する態度には少なくとも影響を与える要因であることが言える。

②性差と死に対する態度の関連

性差の分析では、男性の方が逃避型受容型

な態度をとるという結果であった。「女性の方が、男性よりも死について考えを巡らせるのではないか」という仮説は支持されなかった。男性が死に対して逃避的な受容を行うのは、男性の方が死後生よりも現世での生き方を重視していると考えられる。

一方、先行研究では、女性の方が男性よりも、死を苦しみからの解放と捉えるという結果もでている。性差の研究結果は、先行研究でも結果が一定しないので、研究の統一性について今後検討されていくべきであると考える。

③生や死について考えることへの興味の度合いと死に対する態度の関連

生や死について考えることにとても興味のある群は、そうではない人に比べて死に対する恐怖心が強いという結果であった。生や死について考えることにとても興味がある群は、死に対して回避的な態度を取るというのは、矛盾している結果のように見えるが、大学生にまでなると死について思考することがより具体的で深いものとなるため、恐怖心が強くなり、最終的に死を回避的に捉えてしまうのではないかと推測する。回避というのは、死や生について興味を持って思考を巡らせ、自分なりの死生観について考えてみたときに、死に対して理解が出来ない面や、言葉にしがたい恐怖などを強く感じてしまったために、死についていったん考えを休止する意味も込めて、回避的に捉えたのではないかと考える。

④学科による死に対する態度の関連

臨床心理学科の学生の方が、仏教学科の学生に比べて死を肯定的に受容するという結果であった。学科別のDAP-Rの得点については、臨床心理学科の学生に回答数の偏りがあったことも一要因として考えられる。学科ごとの教育が死生観形成に影響を与えるかを量的に見た研究だったが、学年ごとで学ぶ内容や専門性の違いなどから、あまり学科ごとの死に対する態度について分析することは出来なかった。臨床心理学科生の方が仏教学科生よりも死に対して積極的受容型をとったのは、「無意識」や「魂」などの概念が知識として必要であり、心理学科の「目に見えない心理を扱う」学問が、死後生などの存在に同意する考え方を育てたのではないかと推測できる。

（2）質的研究の結果について

KJ法で分類した自由記述について考察をすると、大学生は生や死について考えを巡らせる際に主に死について連想をするという結果が出た。現代の大学生は、同年代によるいじめ自殺事件の報道や東日本大震災を大学入学前に経験した世代であり、死についてテレビ越しに情報を得て、考える機会が多い年代であった。そのため、今回の自由記述のように死別経験以外の外的要因の項目数が増えたのではないかと推測する。先行研究の結果よりも、死生観形成の要因にアニメや漫画を挙げる人が多いように感じた。

量的研究との結果を合わせると、大学生では、死別経験だけで死生観形成をするのではなく、周りの環境も大きな要因の１つになることが言える。芸能やフィクションでも、死生観形成に影響を与えることが今回の研究で明らかになった。大学生の死生観形成には、様々な要因が絡み合っており、今まで生活してきた環境や経験した出来事、自分以外の人の姿なども重大な死生観形成の要因であることが言える。また、現代社会の多様化の影響も少なからずあるように推測する。

倉田（2008）の研究によると、大学生の死生観形成には死別経験の有無ではなく、死について考える経験が、青年期の死に対する態度を形作る１つの決定因であることが明らかになっている。本研究の結果からも死別経験が死生観形成を司る大きな要因ではなく、一要因にすぎないことが言える。

しかし、死別経験が大きなきっかけであったと回答した学生も多くいた。死別した対象の中には、ペットを亡くした経験を挙げてい

る学生が数多くいた。ペットは学生にとって日常的に近い場所にいて、かつ愛情を注いだ対象である故にペットとの死別は大きな死別体験として語られるのではないかと考える。現代はペットロスの問題も多く挙げられている。ペットロスの観点も今後取り入れることによって、死生観形成の要因がより鮮明化されるのではないかと考える。

（3）結論

今回の研究では、死生観の形成に関する要因について量的研究と質的研究の両方の結果から検討をした。結果として、大学生まで成長した段階で死生観に影響を与えるのは様々な出来事であり、自分がリアルに経験したものだけが、死生観形成の要因ではないということが判明した。更に、死生観の形成には周囲の環境なども大きく関係していることから、死別経験だけが死生観形成の絶対的な要因ではないと言える。死生観形成に絶対的に必要な人生経験や要因というのは未だに研究がされておらず、今回も男性の死生観はこうである、女性の死生観はこうであるなどの断定的に判断することはできない結果となった。しかし、死が関係する出来事というのは少なくとも影響を与え、経験した事柄で死生観の捉え方も異なるということが今回の研究でも言えるものと考えられる。

（4）今後の課題と展望

今回は質的、量的の研究をどちらも行ったが、量的データのデータ数を揃えることが出来なかったことから、分析にばらつきが生じてしまった。更に、死生観という内容が深いものについて量的なデータで結論をまとめようとしたのは少々困難だったように感じる。質的データも、自由記述のみで終わらせてしまったため、死生観形成要因の内容を深めることが出来なかった。

死生観研究は、歴史が浅くまだ研究データが確立されていない部分があり、文化や当時の社会情勢からも大きな影響を受ける分野である。今後の死生観研究を進めていく上では、質的調査を主として行い、より内容を深められる研究方法を行うべきである。個人の経験について掘り下げ、多面的に死生観を捉えることが出来るよう、今後の研究を行っていく必要があるものと考える。

大学生の生や死に対する興味度合いの研究結果からみると、多くの学生が生や死について考えることに興味があると答えていた。しかし、質的研究を見てみると、主に死について考えることが多いようであった。今後は生についての考えも多く取り入れる研究を行うことで、より深く大学生の死生観を捉えることが出来るのでは無いかと考える。

更に、今後はよりバーチャルな死について取り上げられることが多くなり、マスコミで大きく取り上げられた事件などから死生観形成のきっかけとなることもあると考えられるので、様々な可能性を考えて、より死生観形成の要因について研究を進めていく必要があるだろう。

付記

本論文は、2014年度大正大学人間学部臨床心理学科において、卒業論文として提出したものに、加筆・修正したものである。

謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました北星学園大学大学院・牧田浩一先生、大正大学・近藤直司先生に深く感謝申し上げます。また、お忙しい中、調査に協力頂いた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

赤澤正人，藤田綾子（2007） 青年期の死生観に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集 (49), 338, 2007-08

糸島陽子（2005） 死生観形成に関する調査：看護学生と大学生の比較 京都市立看護短期大学紀要 30, 141-147, 2005-09-01

伊藤雅之（2007） 若者の死生観：日本人大学生が抱く死と死後のイメージ 愛知学院大学文学部紀要 37, 95-100, 2007

倉田真由美（2008） 大学生の死に対する態度と関連因子の検討 立命館人間科学研究 16, 95-104

七木田敦（1991） 看護教育における「死の教育」（Death Education）の検討―看護学生・短大学生を対象にした意識調査から― 学校保健研究，33（6）：278-286

丹下智香子（1995） 死生観の展開 名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科 42, 149-156, 1995-12

山下 愛子ら（2006） 大学生における死生観の構造および孤独感との関連 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 6, 39-56, 2006